第１次世界大戦の終結と中東の生成

水　田　正　史

第１節　三月革命とイランにおける力の空白
第２節　反イギリス感情の高揚と南イランの危機
第３節　世界戦争の焦点としてのイランとその周辺部
第４節　英露協商、南ペルシャ・ライフルズ、イランの独立
第５節　第１次世界大戦終結後も終結しなかったイランにおける世界戦争
第６節　ヒジャーズ助成金と「ペルシャ助成金」
おわりに

第１節　三月革命とイランにおける力の空白

1917年のロシアの三月革命は、容易に推察されるようにイランにも大きなインパクトを与えた。

ロシア軍はイランから撤退し、このため、民主党急進派は、もはやロシアを恐れる必要はなく、この国に望み通り秩序をもたらすことができるとの希望を抱いた。だが、さほど時を経ずしてトルコがアゼルバイジャンに侵入し、タブリーズを占領し、ガズヴィーンへと前進しはじめた。彼らの進撃が続けば、イランのみならず中央アジアやアフガニスタンも彼らの視野に入ってくることになる。この点で、中央アジアにおいてドイツ人とオーストリア人の捕虜数千名が自由の身であることは同盟側にとって好材料であった［IPD vol.5, p.807; PGHS vol.1 p.22］。

２月にイギリスは、バクーにおける味方の分子と接触するために小さなグループをアンザリーへと派遣したが、ジャンギャリー（カスピ海南西岸のパルチザン勢力）の敵対によってハマダーンに引き返すことを余儀なくされた。ジャンギャリーはトルコおよびボルシェヴィキと密接な関係にあった。

北イランからのロシア軍の消失は、この地域を同盟側の攻撃にさらすことになるので、この空白をロシア以外の協商国が埋める必要があった。３月にはボルシェヴィキの外交使節がテヘラーンに到着し、同じ頃、ジャンギャリーがラシュト駐在イギリス副領事をかどわかした。テヘラーンにおいても北部全域にわたっても反イギリスの熱狂が目立っていた。モストウフィヨルママーレク内閣は弱体で、この国民的熱狂をしずめる能力も意欲もなかった。

この間、ジャンギャリーがより大胆になり、マンジ―ルおよびガズヴィーンへと進撃しつつあったが、彼らを阻止する武力が存在しなかった。そこで、トルコあるいはジャンギャ

リーが首都を侵略することを未然に防ぐため、イギリス軍をメソポタミア境界地方からケルマーンシャーおよびハマダーン経由でガズヴィーンへと前進させることになった。この諸部隊はガズヴィーンの北方でジャンギャリーを打ち負かしたのち、ビチャラコフ指揮下のロシアの遊撃旅団とともにラシュトとアンザリーを占領した。ここに、バグダードとカスピ海とが連絡することとなった［IPD vol.5, p.807］。

第2節　反イギリス感情の高揚と南イランの危機

だが、この間も、トルコがタブリーズからガズヴィーン方面へと前進しつつあった。モストウフィヨルママーレク内閣が数ヶ月のよろよろとした足どりでの歩みののち5月に倒れ、サムサーモッサルタネ内閣がこれに代わった。南イランにおいて、そして中部でも、反イギリス感情が非常に高揚しつつあった。ロシアは今やイランの友人ソヴィエトとなり、帝政ロシアへのイランの伝統的敵意がそのままイギリスへと対象を移した格好であった。特に南ペルシャ・ライフルズが攻撃の対象となった。ガシュガーイー族が同部隊に公然と宣戦布告した。南ペルシャ・ライフルズのみならず、インドから派遣されたイギリス軍も諸部族によって攻撃された。背後で内務大臣が糸を引いていた［IPD vol.5, p.807;PGHS vol.1, p.22］。

夏の間中、南イランにおける状況は極めて危機的であった。これは、南ペルシャ・ライフルズの兵卒が、将校に対して反乱を起こすよう扇動されたためであった。もし南イランにイギリス部隊が存在しなかったら南部全域が流血の巷と化していたかもしれない。

前の2つの内閣が大きな無力を示したとすれば、サムサーモッサルタネ内閣はイギリスに対する大きな敵意を示した。その閣僚は、南ペルシャ・ライフルズの反乱分子と緊密な関係にあり、それはエスファハーン地方を恐怖に陥れたジャアファル・ゴリー、レザー・ジョウズダーニーらの盗賊行為をやめさせるためのいかなることもなさなかった。それは、条約によってヨーロッパ諸国に与えられたところの一定の司法権を没収しつつあった。テヘラーンではバーザールの一部が閉鎖され、数百名がマスジェデ・シャーおよびシャー・アブドルアズィーム廟に避難し立てこもった。事態は、包囲攻撃を宣する必要が生じるまでに立ち至った［IPD vol.5, pp.807-808］。

第3節　世界戦争の焦点としてのイランとその周辺部

8月には4つの出来事が重なった。第1にバクーへのイギリス部隊の到達、第2にイラン領内へのインド側からの鉄道の延伸の決定、第3にサムサーモッサルタネの更迭、そして第4にイギリスによるクラスノヴォーツク占領である。順に見ていくことにしよう［IPD vol.5, p.808; PGHS vol.1, p.22］。

1918年3月3日、ソヴィエトとドイツ・オーストリアとの間で講和条約（ブレスト・リトフスク条約）が結ばれてから、トランス・コーカサスにおいて事態は急展開した。ドイツがグルジアを占領し、トルコは時を移さずバクーへと進撃した［PGHS vol.1, p.22］。

バクーはいうまでもなく、カスピ海に面する戦略的要衝の地であるとともに油田の地でもある。油田を持たないドイツにとってのどから手が出るほどの存在である。この都市を獲得すればドイツ有利へと戦争の流れを変えることができるかもしれなかった。そこでドイツはブレスト・リトフスク条約締結後、バクー獲得を目指すこととなる。

だが、同盟国トルコが一足先を越して進撃を開始した。トルコがバクーを制圧して油田を破壊してしまうことを恐れたドイツは、ボルシェヴィキ政権に対して、トルコの進軍を抑える約束をし、その交換条件として石油供給を要求した。レーニンはこれを受諾した。20世紀初頭にバクー油田でストライキを指導したことのあるグルジア人スターリン――あのスターリンである――がバクーのボルシェヴィキ地区委員会に対し、このドイツの要請に応じるよう打電したが、同委員会はこれを拒否した。一方トルコもドイツの要請を無視し、バクー進撃をやめず、７月末までにバクーを包囲し、８月初めには油田のいくつかを接収した［Yergin p.182, 邦訳(上)300～301ページ］。

バクーのボルシェヴィキ・アルメニア政府――これがカスピ海艦隊を掌握していた――は７月末、イギリスの援助を請うた。８月初め、ダンスターヴィル将軍麾下のイギリス部隊――将軍の名前をとってダンスターフォースと呼ばれる――がアンザリーからバクーに到達したが、９月15日船で去ることを余儀なくされた。トルコが同市を占領したが、船はまったく確保していなかった。だが、彼らは数週間のうちに占領地域を、北はダーゲスターンまで、南はイラン領アゼルバイジャン（カスピ海沿岸部も含む）まで広げた。そして、このようにしてイラン領アゼルバイジャンを同名の共和国に併合するための、そしてそれら全体をトルコに従属するムスリム国家へと組織するための処置をとりつつあった［PGHS vol.1, p.22］。

このように述べれば、ダンスターフォース遠征は失敗であったかのような印象を読者に与えるかもしれないが、そうではなかった。すなわち、同遠征は、少なくともドイツの手にバクーの石油が渡るのを防ぐ役割を果たしたと考えられるからだ。ドイツのルーデンドルフ将軍はのちに、これがドイツにとって深刻な打撃となったことを認めた［Yergin p.182, 邦訳(上)301～302ページ］。

次に、イラン領内への鉄道の延伸の問題を一瞥しよう。２年前の1916年夏、インド政庁はバルーチスターンのヌシュキからイラン国境のミールジャーヴェまで鉄道を延伸しはじめた。これは、イランで生じうる好ましからざる事態に備えてのことであり、また、東ペルシャ哨兵線（East Persia Cordon）への補給のためであった。この線をイラン領内のドズダーブ（現ザーヘダーン）まで延ばすこと、そして同線をさらにネまで延ばすための測量を仕上げることをイギリス政府が認可したのが、この1918年８月のことであった。

これもやはり、ロシア革命すなわち帝政ロシアの崩壊という激震の所産であり、いま少し特定して表現するならば、カスピ海沿岸地方への、そしてその先のインドへのトルコとドイツの脅威に鑑みてのことであった［PGHS vol.1, p.22］。

第３にサムサーモッサルタネの更迭についてである。これは８月３日のことであったが、彼はこれを拒否した。この間、タブリーズからのトルコの進撃は、予想されていたほど迅速でなく、上述の通りダンスターフォースがバクー遠征を行なっていた。

はるかヨーロッパの西部戦線においては、この８月頃には、情勢は協商側有利へと転じつ

つあった。すなわち、ブレスト・リトフスク条約によって東部戦線から解放されたドイツが、春に西部戦線で大攻勢をかけたが、７月には協商側が反撃に成功していたのであった。加えて、パレスチナとブルガリアにおいてイギリスが成功を収めた。

サムサーモッサルタネは結局退き、より親イギリス的なヴォスーゴッドウレ内閣がこれに代わったのだが、このことは、以上のような世界的大状況の反響にほかならなかった［IPD vol.5, p.808］。

最後に、イギリスによるクラスノヴォーツク占領である。上述のような響きの伝わり方については、カスピ海の西岸から東岸へという経路もあった。

トランス・コーカサスでの事態の流れをみて、イギリス政府は、カスピ海東岸にありザカスピ鉄道のターミナルであるクラスノヴォーツク占領を命じた。これは８月末に達成された。また、イギリス海軍の派遣隊が蒸気船を確保した。

こうした措置によって、イギリスのカスピ海支配は、南岸の中心地アンザリーが確保されている限りにおいて保証され、トルコとドイツの軍事行動はこの海の西岸の限定されたのであった［PGHS vol.1, p.23］。

トルコがなぜこの時期カスピ海の東の彼方をみていたのか、簡単に説明することにしよう。

その直近の契機はメソポタミアとアラビアにおける敗北であったといえよう。敗れたトルコは、黒海、コーカサス、カスピ海、中央アジアという方向に活路を求めたのであった。コーカサスと中央アジアにはトルコ系の諸「民族」が居住している。すなわち、この方向への活路は、言語・「民族」の同一性という現実的基礎に支えられており、またパン・トルコ主義という大いなる野望の表現でもあったのである。

中央アジアにおいてはブハラのアミール国がまだ消滅していなかったので、この地域全体でパン・トルコ主義が顕在化し、トルコの軍事行動の基地となる可能性があった。この地域と長い国境線を接するイランは、当然のことながら平静ではいられなかった。イギリスもインドへの影響を懸念した［Avery pp.198-199］。

第４節　英露協商、南ペルシャ・ライフルズ、イランの独立

このように、イランのみならず周辺諸地域を含めて多くのことが、イランにおけるイギリスの地位が保たれているかどうかという点にかかっていた。このため、インド政庁はイランの政府と人々のイギリスへの信頼を回復させるような政策を主張していた。これには２つの障害があった。１つは英露協商であり、いま１つは南ペルシャ・ライフルズである。

イギリス政府は同協商が一時的に失効しているとみなす、とすでに宣言していたし、また、「南ペルシャ・ライフルズ」という名称を廃止し同部隊をイラン軍の一部として扱うことにやぶさかではなかった（ただし、戦争中はイギリス人将校は同部隊内にとどめておくべきだと強く主張した）。その見返りとして、イギリス政府は南イランにおける秩序回復にイラン政府が協力するよう求めた。

前述の通り、８月に前内閣よりも親イギリス的なヴォスーゴッドウレ政権が成立した。９

月、同内閣は以上の２点に加えて、イランの独立、この３点に関するイギリスの政策を明言するよう強く求めた。その結果、11月23日、イギリス政府はイラン政府に次の通り保証した。

①イギリス政府はイランの独立に関する誓約をここに繰り返す。
②イギリス政府は英露協商が一時的に停止していると見なしており、それを更新する意図はまったくなく、その廃棄に向けて努力する。
③南ペルシャ・ライフルズは、すでに両政府によって合意された保障と留保が得られることを条件として、ファールス総督へと移管される［PGHS vol.1, p.23］。

ヴォスーゴッドウレは、国内の治安問題に大きな成果を上げた。すなわち、まず第１に、彼は懲罰委員会を処理した。暗殺犯の一部は絞首刑に処せられ、間接的な関与にとどまった者たちも国外追放された。第２に、彼はエスファハーン地方の盗賊ジャアファル・ゴリーとレザー・ジョウズダーニーの殲滅に成功した。これは、バフティヤーリーの一族の者を知事にし、南ペルシャ・ライフルズの砲兵隊の助けを得た上でのことであった［IPD vol..5, p.808］。

国内の治安維持問題といえば、ブーシェフル・シーラーズ道の問題がある。この道路を通行可能にするための準備が６月に着手され、９月中頃に整った。だが、反逆的なハーンたちは依然として大胆不敵で、交渉の提案をすべて拒否した。このため、イギリスの部隊が派遣されることとなった。この軍事行動はペルシャ政府の是認と支持を得ていた。

９月26日、ブーシェフルから進撃が始まった。これは、軽便鉄道敷設と道路建設の工事をともなって行なわれた。軍事行動は年末に完了することができると期待されていた。ところが、工事が難渋し、加えてインフルエンザの大流行———世界的に大流行したいわゆるスペイン風邪———もあったため、予定通りに行かなくなってしまった［PGHS vol.1, p.23; PGTR Bushire vol.2, pp.1918-1919］。

第５節　第１次世界大戦終結後も終結しなかったイランにおける世界戦争

1918年10月30日、協商側とトルコとのあいだでムドロス休戦協定が結ばれた。これによって協商側は黒海へ自由にアクセスできるようになり、バクーとバツーム（黒海沿岸の町）を占領し、そしてトルコ軍に、イランからの撤退を要求した。タブリーズの南に居たトルコ軍は徐々に自らの領土へと戻っていった［IPD vol..5, p.808; PGHS vol.1, p.23］。

11月11日、ドイツと協商側との休戦協定がパリ北東のコンピエーニュの森で調印された。通常、これをもって第１次世界大戦の終結とみなされる。だが、イランでは戦争が終わったとはいえなかった。イギリスとロシアの軍隊が国土のかなりの部分を支配していた。カスピ海沿岸にはジャンギャリーという「不安定要素」が存在した。中央政府の力はきわめて弱く、イギリスからの月々の助成金なくしてはそれなりの機能さえ果たしえなかったことであろう。西部を中心に人々は飢饉に苦しんでいた。

ここでは、これら領土的統合と国家維持金融――もはや財政という言葉はふさわしくないように思う――と飢饉、この3つの問題について、ここに至る1年ほどの経緯を見ていくことにしよう。

領土的統合については、すでに1918年3月3日のブレスト・リトフスク条約に次のように明記されている（第7条）。

「ペルシャとアフガニスタンとが自由で独立した国家であることに鑑み、本条約締結当事国は、これら両国の政治的・経済的独立と領土的統合とを尊重することを約束する。」

［Министерство Иностранных Дел СССР т.1, с.123］

これは、モストウフィヨルママーレクが、そしてのちにはケルマーンシャーにおけるイラン民族主義者の臨時政府が同盟側と結ぼうとした秘密協定の精神を反映するものであった［Avery pp.200-201］。

また、1918年1月、イギリスはアメリカに、戦後にイラン政府に対して領土的統合の尊重などを宣言するという点でイギリスとフランスに加わらないか、と呼びかけている。

同じ頃、イギリスはアメリカに、金融的観点からイランを援助することについての打診も行なっている。具体的にはそれは、「銀の貸出」という形であった。そのためにアメリカはイギリスよりも良い立場にあるというのである。イランは銀貨圏であったから、イギリスとしてもまずは金ではなく銀が確保できるかどうかを心配しなければならないのであった［RDSRIAP reel 18, 891.51/211］。

そして飢饉である。同年4月7日、イラン駐在アメリカ公使コルドウェルは本国国務長官宛に次のように打電している（短いので、宛名や署名を除いた本文というべき部分をすべて訳出しておく）。

「ペルシャ政府は、アメリカ合衆国がペルシャに対して100万トマーン（現在の為替相場で約2万ドル）の借款――その全額が、ペルシャにおける飢饉の救済の目的にのみ使われ、私の直接的管理下に置かれる――を供与するかどうか確かめるよう私に要請している。私は、この要請を真剣に検討し、可能ならばこれに応じることが大変有益な効果を有するのみならず、大変人道的な行為であり、現下の恐ろしい状況を改善することになる、と心よりお勧め申し上げる次第である。電信での返答を請う。」［RDSRIAP reel 18, 891.51/212］

領土的統合と国家維持金融との組み合わせは、19世紀末の外国からの借款にまで遡ることができようが、大戦末に、飢饉がこれに加わるに至ったのである。

第6節　ヒジャーズ助成金と「ペルシャ助成金」

目をアラビア半島のヒジャーズに転じよう。別稿（「第1次世界大戦期におけるヒジャー

ズ国立銀行設立問題」本誌第147号、33～45ページ）で述べた通り、ここでも資金が不足していた。

1918年１月３日、カイロのウィンゲートは、本国外務省宛に、ジッダのゲラトリー・ハンキーが、すでに認可された月々の助成金１万8,000ポンド以外に５万ポンド必要としている、と打電している［RH vol.7, p.555］。

ヒジャーズで必要とされていたのは、これも別稿で述べた通り、銀よりも金であった。イギリスにとって当てにできるのは、エジプトにおける金の唯一の利用可能な源泉たるエジプト国民銀行発券部におけるそれであった。同行同部の金のうち、すでに300万ポンド以上が軍事的政治的目的のために引き出され、残るは67万ポンドとなっていた。これに対して発券高は3100万ポンドにのぼり、したがって、金準備の枯渇が憂慮された［RH vol.7, p.557］。

イギリス政府は前年の８月に、エジプトが貢献すべきは、最大限で10万ポンドということで合意していた。だが、この時点以後引き出された額は62万ポンドにのぼる。内７万6,000ポンドは１月分の「ヒジャーズ助成金（Hedjaz subsidy）」であった。実は、「ヒジャーズ助成金」を含むこのような必要資金の内40万ポンドをイギリスが金で肩代わりすることになっていたが、まだエジプトに届いていなかった。

このように、イギリスは資金の工面に苦労していた。ジッダのイギリス当局者たちは、ゲラトリー・ハンキー商会のインド国民銀行における口座を利用して、「ヒジャーズ助成金」としての５万ポンドをボンベイ宛に振り出してもよいか、インド省にたずねた［RH vol.7, p.566］。

これをインド省から知らされた財務省は２月２日、これに応えて次のように打電している。

「もしインド政庁が、要求された金額75万ルピーをインド国民銀行におけるゲラトリー・ハンキーの勘定の貸方に支払うならば、わが上司たちは、150万1,937オンスの銀――それはインド政庁の在サンフランシスコ代理人たちに渡され、現在（必要とあらば）ペルシャへ向けて積みかえるためにインドへと運ばれている――から、貸し出された75万ルピーを造幣するために必要な額の銀を、そのような造幣の費用をカヴァーするための追加的金額とともに手放す用意がある。」

以上で、ヒジャーズへの資金供与とイランへのそれ――これを「ヒジャーズ助成金」という表現にならって「ペルシャ助成金」と名づけることができよう――とが１つの文脈に収まっている。筆者はここに、世界金融史的観点からみた、今日的な意味での中東の成立を見出すものである。

おわりに

1917年、ロシアで三月革命が勃発した。ロシア軍はイランから撤退した。このことは、民主党急進派に希望を与えた。だが、さほど時日を経ずしてトルコがイランに侵入し、タブ

リーズを占領し、ガズヴィーンへと前進しはじめた。さらに東へと進めば、アフガニスタンや中央アジアやインドが彼らの視野に入ってくることになる。

北イラン全域において反イギリスの熱狂が目立っていた。モストウフィヨルママーレク内閣は弱体で、この熱狂を鎮める能力も意欲もなかった。この間、ジャンギャリーがマンジ―ルおよびガズヴィーンへと進撃しつつあった。

このように、首都テヘラーンが、トルコおよびジャンギャリーの脅威にさらされていた。そこでイギリスは、部隊をメソポタミアからガズヴィーンへと派遣した。イギリス部隊はガズヴィーン北方でジャンギャリーを打ち負かし、ロシア軍とともにラシュトとアンザリーを占領した。ここに、協商側によってバクダードとカスピ海とが連絡することになった。

だが、この間も、ガズヴィーンへ向けてのトルコの前進はつづいていた。5月にはモストウフィヨルママーレク内閣が倒れ、反イギリスのサムサーモッサルタネ内閣がこれに代わった。南イランでは反イギリス感情が非常に高揚しつつあった。ロシアは今やイランの友人ソヴィエトとなり、帝政ロシアへのイランの伝統的敵意がそのままイギリスへと対象を移した格好であった。特に南ペルシャ・ライフルズが攻撃の対象となった。また、南ペルシャ・ライフルズの兵卒が、将校に対して反乱を起こすよう扇動された。これら反乱分子はサムサーモッサルタネ内閣の閣僚と緊密な関係にあった。

エスファハーン地方、すなわち中部におけるジャアファル・ゴリーやレザー・ジョウズダーニーらによる盗賊行為に対しては何の手も打たれなかった。テヘラーンではバーザールが閉鎖され、数百名が宗教施設に立てこもった。

8月には4つの出来事が重なった。

第1に、バクーへのイギリス部隊の到達である。1918年3月3日、ソヴィエトとドイツ、オーストリアとのあいだでブレスト・リトフスク条約が結ばれてからトランス・コーカサスにおいて事態が急展開した。ドイツがグルジアを占領し、トルコがバクーへと進撃した。バクーは戦略的要衝の地であるとともに石油生産の地でもある。油田を持たないドイツはブレスト・リトフスク条約締結後、バクーを目指すこととなる。だが、同盟国トルコが一足先を越して進撃を始めた。トルコがバクーを制圧して油田を破壊してしまうことを恐れたドイツは、ボルシェヴィキ政権に対して、トルコの進軍を抑える約束をし、その交換条件として石油供給を要求した。レーニンはこれを受諾した。だがバクーのボルシェヴィキ地区委員会はこれを拒否した。トルコもバクーへの進撃をやめず、8月初めにはいくつかの油田を接収した。

バクーのボルシェヴィキ・アルメニア政府はイギリスに援助を請うた。8月初め、ダンスターフォース（ダンスターヴィル将軍麾下のイギリス部隊）がアンザリーからバクーに到着したが、翌月には撤退を余儀なくされた。同市を占領していたトルコは占領地域を、北はダーゲスターン、南はイラン領アゼルバイジャンまで広げた。トルコはイラン領アゼルバイジャンを含めたこれら諸地域をトルコに従属する国家へと組織しようとしていた。

ダンスターフォースのバクー遠征は、ドイツの手にバクーの石油が渡るのを防いだという点で成功であったといえる。

第2に、イラン領内へのインド側からの鉄道の延伸の問題である。すでにインド政庁はバルーチスターンのヌシュキから対イラン国境のミールジャーヴェまで鉄道を延伸しはじめて

いたが、これをさらにイラン領内までのばすことをイギリス政府が認可したのが1918年８月のことであったのである。

第３に、サムサーモッサルタネの更迭である。これは８月３日のことであった。代わって政権をになったのが親イギリスのヴォスーゴッドウレであった。この背景には、ヨーロッパの西部戦線において協商側有利へと情勢が転じつつあったことや、パレスチナとブルガリアにおけるイギリスの成功があった。加えて、タブリーズからのトルコの進撃が予想されていたほど迅速でなかったことや、ダンスターフォースのバクー遠征も政権交代の大きな要因であった。

第４に、イギリスによるクラスノヴォーツク占領である。クラスノヴォーツクはカスピ海東岸に位置するザカスピ鉄道のターミナルである。８月末、イギリスがこの町を奪取した。イギリスがこれを行なったのは、以上でみたトランス・コーカサスにおける事態の展開を受けてのことである。

このように、イランのみならず周辺地域を含めての多くのことが、イランにおけるイギリスの地位が保たれているかどうかという点にかかっていた。このため、インド政庁は、イランの政府と人々のイギリスへの信頼を回復させるような政策を主張していた。これには、英露協商と南ペルシャ・ライフルズという２つの障害があった。そこでイギリスは、英露協商が一時失効していると宣言し、南ペルシャ・ライフルズのイラン軍への編入を持ち出した。そして見返りに、イラン政府が南イランの秩序回復に協力するよう求めた。

これに対してイラン政府は、上記２点に加えてイランの独立、この３点に関するイギリスの政策を明確にするよう求めた。その結果11月、イギリスは、イランの独立に関する以前の誓約を確認すること、英露協商が一時的に停止しており、その廃棄に向けて努力すること、そして南ペルシャ・ライフルズをファールス総督へと移管すること、この３点を明言した。

ヴォスーコッドウレは国内の治安問題に大きな成果をあげた。すなわち彼は、懲罰委員会の処理とエスファハーン地方の盗賊の殲滅に成功したのであった。だが、南部の治安はいまだ改善されず、イギリスが部隊を派遣するにいたった。

1918年10月30日、協商側とトルコとのあいだでムドロス休戦協定が結ばれた。これによって協商側は黒海へ自由にアクセスできるようになり、バクーとバツームを占領し、そしてトルコ軍に、イランから撤退するよう要求した。タブリーズの南にいたトルコ軍は徐々に撤退していった。

11月11日、ドイツと協商側とのあいだで休戦協定が、パリ北東のコンピエーニュの森で調印された。通常、これをもって第１次世界大戦の終結と見なされる。だが、イランでは戦争は終わったとはいえなかった。イギリスとロシアの軍隊が国土のかなりの部分を支配していたし、ジャンギャリーという「不安定要素」が存在した。中央政府の力はきわめて弱く、イギリスからの資金注入でようやく命をつないでいるという状態であった。西部を中心に人々は飢饉に苦しんだ。これら、領土的統合、国家維持金融、そして飢饉の問題についてここに至る１年ほどの経緯を簡単にまとめれば以下のようになる。

まず、領土的統合の問題であるが、1918年３月のブレスト・リトフスク条約で、イランの領土的統合の尊重が明言されている。その２ヶ月前、同年１月には、イギリスがアメリカに、イランの領土的統合の尊重を戦後に宣言することに加わらないかと誘った。加えてイギ

リスはアメリカに、イランへの銀の貸出を行なわないか、と打診している。また、イランはアメリカに、飢饉救済のための約２万ドルの資金供与を依頼している。

資金が不足していたのはイランだけではなかった。ヒジャーズでもそうであった。ヒジャーズで必要とされていたのは、銀よりも金であった。イギリスはこの地にゲラトリー・ハンキー商会を通じて定期的に資金を注入していたのだが（ヒジャーズ助成金）、それでも足りないという状況に陥っていた。エジプト国民銀行発券部の金準備も底をつきつつあり、これ以上あてにはできず、「イギリス自身」が資金を肩代わりした。

このようにイギリスは資金の工面に苦労していた。インド政庁の資金をインド国民銀行を経由して入手するという案が考え出された。もしインド政庁がこれに応じるならば、これら資金を造幣する費用をイギリス財務省が供与する、とされた。この費用は、イランへ向けて積みかえるためにすでにインドへと運ばれている資金から支払われるとされた。

このように、ヒジャーズへの資金供与とイランへのそれとが１つの文脈に収まった。ここに筆者は、世界金融史的観点からみた中東の成立を見出すことができると考える。

〔付記〕　本稿は日本学術振興会科学研究費補助金（課題番号：18530271）による研究成果の一部である。

参考文献

Avery, Peter, *Modern Iran,* Ernest Benn, London, 1965

IPD : *Iran Political Diaries, 1881-1965*,14vols., Archive Editions, Gerrards Cross, Bucks.1997

Министерство Иностранных Дел СССР, *Документы Внешней Полики СССР,* Издательство Политической Литературы, Москва, 21т., 1957-1977

PGHS : *The Persian Gulf Historical Summaries, 1907 − 1953,* 4vols.,Archive Editions, Gerrards Cross, Bucks., 1987

PGTR: *The Persian Gulf Trade　Reports, 1905 − 1940,* 8vols., Archive Editions, Gerrards Cross, Bucks., 1987

RDSRIAP : *Records of the Department of State Relating to Internal Affairs of Persia, 1910-1929,* 37 reels, National Archives and Records Service, Washington, 1968

RH : *Records of the Hijaz,* 8 vols., Archive Editions, Gerrards Cross, Bucks., 1996

Yergin,Daniel, *The Prize : The Epic Quest for Oil, Money, and Power,* Simon & Schuster, New York, 1990 （日高義樹・持田直武訳『石油の世紀』日本放送出版協会、1991年）